

Kurahashi ART DOCUMENT

2002

臨界域

Kurahashi ART DOCUMENT 2002

臨界域

2002年10月5日-10月31日

広島県安芸郡倉橋町本浦地区と桂浜周辺

ごあいさつ

倉橋町が倉橋島村から町制施行された昭和27年以来、わが国におけるこの50年は経済の高度成長による、物質的な豊かさを求めた時代の中で推移してきました。ようやくそれが成就しつつあることによって、現代人には真の豊かさとは何かが問われる新しい時代が訪れようとしています。

倉橋町の歩んだ50年の道のりは、日本の近代化に大いに貢献し、そのことを通じて培われた独自の文化・風土は、目を見張るものがあり、恵まれた自然・歴史資源と相まって現在の私たちの誇りとなっています。

さて、本町では恵まれた資源を生かした万葉のふるさとづくりを推進し、桂浜周辺を歴史・文化・レクリエーションゾーンとして位置付け、万葉集に詠われた松原に、遣唐使船建造の歴史にちなんだ長門の造船歴史館等を整備しました。また、地域間交流のシンボルとして桂浜ふれあいセンターの建設や各種イベントを開催することによって、倉橋の新しい魅力を創造してきました。

このたび、倉橋町制50周年記念事業として開催された「倉橋アートドキュメント 2002 -臨界域-」は、先人が守り築いてきた美しい倉橋島を舞台に、8人の芸術家の皆さんが持つ、アイデンティティーが鮮烈に発揮され、2,000人を超える見学者が町内外より訪れました。海辺や民家の軒先に突如として現れた芸術作品群は、観るものに新たな想像力と価値観という真の豊かさを与えてくれるだけでなく、倉橋の新しい魅力の創造の場にもなったのではないのでしょうか。

この事業を行うにあたり、特段に御協力を賜りました広島市立大学芸術学部の皆様、オープニングに際し御祝辞を頂きました、呉市立美術館長倉橋清方様、広島市立大学長藤本黎時様、芸術学部長細井良雄様をはじめ関係者各位に厚く御礼を申し上げ、また、この事業が地域文化の見直しと新たな創造の糧となることを祈念し、ごあいさつといたします。

2003年1月

倉橋町長
石橋 杉嘉



ごあいさつ

「Kurahashi ART DOCUMENT 2002 -臨界域-」の成功を祝して

今回のイベントは、ドキュメントという表題が示すように、ヒトもモノも含めて町全体が芸術活動・行動をするように巧みに計画されたイベントでした。「作品展」としないで、「アート・ドキュメント」としたところに、着眼点の新鮮さとさわやかなショックを感じます。また、「臨界域」という言葉から連想するのは、宇宙のビッグバンが起こる直前のように、内包されたエネルギーのマグマが煮えたぎって今にも沸騰し噴火しそうな状態です。この言葉ほど、若々しいエネルギーと活力のみなぎった芸術活動を適切に表わしている言葉はありません。

作品は、海辺や海上のどんがめ岩や路地裏まで、町内の各所に点在しています。イベントの参加者たちは、まるで宝探しのように、地図を頼りに作品を探し出して鑑賞しているうちに町内をすみずみまで歩くことになり、作品の発見はこれまで見落とされていた町の貌（かお）の再発見となりました。

伝統的な古い町並の各所に独特な芸術作品が置かれているのを見ると、伝統的な美の観念から逸脱していると感じ、ショックを感じる人がいるかもしれません。しかし、そのショックこそ新しい美の観念そのものであり、現代の美の創造にほかなりません。新しいモダンな作品が伝統的な古い町のたたずまいと絶妙に融和し、不思議に違和感を感じさせません。伝統

的な古い町にとって一見異質な芸術作品を積極的に受け入れて下さった倉橋町民の柔軟な思考と寛大な精神と旺盛な好奇心が、今回のイベントを成功させる大きな原動力となったのでした。

作品たちは展示室のような常識的な空間から解放されて、土地の日常的な現実空間や風景の中に置かれることによって、土地の地勢、伝統、信仰、慣習、因習などの土着的要素を帯びることにもあり、新たなリアリティ（実在性）を獲得しているように思います。私たちは、個々の作品について今まで気づかなかった新たな価値を発見することができました。それが今回のアート・ドキュメントの大胆な試みの成功の秘訣でした。

夕闇が迫る頃、桂浜温泉館の芝生の庭で開催されたコンサートは心憎い演出でした。観客席と演奏者たちとを仕切る境界線として、芝生の上に50本のワイングラスが緩やかな弧を描いて並べられ、ワイングラスの中の口ウソクに灯が点されました。50本のワイングラスが作る境界線は昼と夜の境目、トワイライト・ゾーンとなり、その向こうの桂浜は漆黒の闇に包まれていました。かすかな口ウソクの明かりと、鉄製の台上でばちばちと音を立てて燃えるかがり火が舞台照明となって幽玄の世界が現出しました。

オープニングコンサート



コンサートは、タイトル「臨界域」をイメージするシーンを設定し選曲・構成された。会場空間については、展示作品とかがり火、そしてパフォーマンス空間を際立たせる、キャンドルによる境界によって構成された。演奏は、日没薄明から闇に移行する時間帯を設定し、演奏者はシーン構成に合わせて演奏位置を移動した。

まず、インディオのアシ笛ケーナを吹きながらの石丸良道氏の登場です。いかにも地霊を呼び覚ますかのような素朴なケーナの音に続いて、榊記彌栄氏の箏の演奏が始まります。やがて、演目はフルートと箏の二重奏から、榊氏による箏曲の独奏に移ります。榊氏は十三絃をさらに多絃の箏に取り替えて弾き続け、絃の響きは時間の制約の中で刻々と生まれ刻々と消えて行くドキュメントとして、聴くものの心の中に残像を作ります。次第に猛々しく鳴り響く絃の響きは戦乱を象徴し、この世の終焉を予感させます。また、次第にデクレッシェンドする絃の響きが伝えるのは、戦乱後の虚無的な混沌状態なのでしょうか。絃が鳴り終わったとき観客はほっとした安堵感を覚えました。静寂の中でフィナーレとして再び奏されるケーナの寂しい音色は、観客の心に平和への祈りを呼び覚ましました。

今回のイベントは町全体の芸術活動の記録であり、作品の探索やコンサートをとおして、芸術家たちと私たち観客とが一体となって燃え、心を一つにして楽しむことができました。かつて、6世紀頃、東ローマ帝国のユスティニアヌス皇帝治下のビザンティン文化最盛期には、芸術家と職人との区別はありませんでした。彫刻家、画家、モザイク師、金銀細工師、建築家、写本彩色師たちが制作したものは、芸術作品であると同時に

日常的什器類であって、芸術作品と日常的なものとの区分はありませんでした。大衆は芸術を理解し、受容し、芸術家と大衆とが一体になっている世界、審美生活と実生活とが一致した「文化の統一」を実現した世界でした。今回のイベントは、そういう意味でもささやかな「文化の統一」の再現であり、アーティスト（artist）とアーティザン（artisan）とが一体となっている世界の実現でした。（英語世界では、16世紀頃までアーティザンという語は芸術家を意味していました。）

最後に、倉橋町町制施行50周年記念事業の一環として、今回の記念すべきイベントを主催され、多大のご援助を賜った倉橋町の石橋杉嘉町長をはじめ、イベントを積極的に推進してくださった倉橋石材工業株式会社、芸術活動に賛同して快く場所を提供し、ご協力下さった倉橋町民の皆様、さらに物心両面で暖かいご援助を賜った関係者各位に心から御礼を申し上げます。

2003年1月

広島市立大学長
藤本 黎時



オフ・ミュージアムということ

「倉橋アートドキュメント 2002 - 臨界域 -」の意味

松田 弘

近年、私は「オフ・ミュージアム」という概念について考えている。この言葉は、私が造った造語で、博物館学的にはまだ認知されてはいない。英語表記では「Off Museum」となり、その意味は美術館（museum）から離れる（off）というようなものである。具体的には、美術館（野外美術館も含む）での作品の展示という形態から離れ、美術館という枠組みや制度から全く無縁な場所で作品を展示し、美術の意味を再度考えてみようとする試みとその行為のことである。

私はこのオフ・ミュージアムの概念が、今回の倉橋町での野外展（一部屋内展示を含む）「倉橋アートドキュメント 2002 - 臨界域 -」の意味を考える時、有効であると思っている。なぜなら、そこに展示された作品は、その大きさだけを見ると、美



術館の展示室にも展示可能なものであるにもかかわらず、倉橋町という一つの地域をその展示場所として選んでいること。そしてこの展覧会は外形的にもそれが内包する意味からも、美術館という枠組みや制度、もっと言えば美術館が推進してきた近代美術史の枠組みから離れようとするエネルギーと磁場を有しているからである。

近代美術の歴史は、端的に言えば、美術作品がキリスト教の教会堂や王侯諸公の館という特別な場所を飾るもの（つまり宗教画や歴史画あるいは肖像画）から、美術館の壁面や空間を飾るもの（つまり作家の自由な意思にもとづく作品）へと変化していった歴史ともいえる。別な言い方をすれば、作品が、それが展示される場所の意味から開放されて、作品それ自体がもつ芸術的価値そのものが問題とされるようになったのである（いわゆる「美術のための美術」）。そして作品それ自体の意味や価値を最も際立たせるためには、余計な装飾を廃した美術館の白い壁面や空間（ホワイトキューブ）が最適であった。そして美術館は単に、そのような美術作品を展示するためのスペースから、どんな作品が美術作品として価値があるのかということの人々に宣言し、啓蒙し、それを決定づける場所としての機能（制度）を持つようになったのである。

このような近代の美術館の枠組みと制度は、美術作品の意味を純粋に、かつ強固にしたかに見えた。誰もが美術館に展示されている作品は、芸術的価値が高いものであると信じるようになり、そのことを疑うことはなくなったのである。作品のオリジナリティーと自律性（独立性）が問われ、作品が国や民族、歴史や時代の枠から離れ、それ自体で完結した完全な美的価値体系を有するように期待された。そうでない作品は美術としての強度と普遍性を持っていないという評価がなされ、退けられてきたのである。だが、このような近代の美術館を中心とした作品の評価システムは、同時に美術の持つ意味を矮小化し、その力を弱めてしまったのではないか。

そのような美術館システムの持つ問題に対抗できる一つの方法として、私はオフ・ミュージアムという方法があると思う。美術館というニュートラルな空間に作品を置くことは、つまり作品自体の意味を何者にも干渉されず、そのまま伝えようとするのである。一方、オフ・ミュージアムでは、作品と、それが置かれる場所やその歴史的文脈との相互作用が重要な問題となる。作品単体での意味よりも場所との共振や共鳴（場合によっては反発）が問題となり、近代美術史における「美術のための美術」という、作品それ自体の芸術的価値を問題にする流れとは別の文脈を求めることとなる。

今回の倉橋町では、神社の鳥居の周辺、そこから参道を通じて至る境内と建物の内部、美しい海岸線の砂浜や岩場、日常生活が繰り広げられている道路端や民家の庭先、今は誰も住んでいない住宅、町が作った新しい温泉館の庭など、いろいろな場所に作品が展示されている。もちろん作品の一つ一つはそれぞれ独自の意味内容を持っているが、それらは展示される場所と密接な関係性を築こうとしている。倉橋町の歴史と環境、そしてそこに暮らす人々の息づかいの中にそれらは存在し、美術館の展示室では実現されるはずもない、独自の意味内容を持つに至っている。それはかつて美術が確かに有していたはずの、具体的な人々の生活と心情に根ざした人間精神の深みに近づこうとする、柔軟で豊穡な試みなのだと思う。

ここには美術に人間の体温を通わせ、再度われわれの側に取り戻そうとする、真摯な作家たちの精神が存在している。

（まつだ・ひろし／広島県立美術館主任学芸員）





造形のすなどり

行ってきた臨海の見てきた臨界域

大井 健地



ヴァレリーの『海辺の墓地』を僕は読んだと思うがもう今は昔、残るのは、陽を浴びる白い石とただひたすらに青い海、——海辺の墓地のイメージ。その海は断固、地中海であらねばならぬ。西欧文化の根源の生と死に光と影が明晰に形を与え、永遠が信じられる思索に人間を誘うのは断固、光まぶしく風吹きわたる海辺でなければならぬ。

そして今、風もなくいいお日和の秋の日、ぶらりと散策するこの地は瀬戸内海、倉橋町の入り江。桂浜温泉館のよく整備された一画からである。「温泉」の文字に出会い、心はたっぷりあたたかくなっている。

既になじみのある伊東敏光《湖景立像》と、いつか写真で見た木村東吾《集積融合》が緑の芝生の上で出迎えてくれる。この明るい新造成地は彫刻の草原舞台のようである。

その東側のこんもりと小暗い神社の、ゆかしく端正な石段を上がれば、参道を活気づける和田拓治郎《成功の方法》がある。そして拝殿内部中央に同じ作家の《欲郷》がある。ウム、なかなかである。元来、僕はこの作者ならびにこの傾向に冷たいのである。技術の先走りがあってヒューマニティに欠ける。なぜこうアクロバット・グロテスクにひた走るのか。だが、だが今回のこの設定はとても良い。環境に適合し環境を支配している。「Kurahashi Art Document 2002 - 臨界域 -」全体が彼のためにあったのかと嫉妬したくなるほど。いやほんとだ。

鑑賞の道行でのちに見た、やはり神社神域に展示された落田彩《深く静かな響》と併せて、ここにはいろいろに考えるべきことがある。近世の村落にとって鎮守の神（産土神、氏神）さまがいかにように村落を村落づけたかをしばし考えさせられるのだ。やや古いデータだが、1984年NHKの世論調査で信仰をもっていない日本人は65%、81年の朝日新聞調査では62%である（末木文美士『日本仏教史』92年による。新潮文庫96年9月）。平成の日本人100人のうち仏教系信者27人、神道系が4人という。

戦前の国家神道はいざ知らず——いや小泉の靖国参拝執着を見れば歴然たる国際問題だが——冠婚葬祭の実状を点検すれば現代の神社の文化的不振は明らかといえないか。辛うじて年始の初詣でと秋の五穀の収穫大祭ぐらいだろうか、不信心者で横着者の僕ごときが参拝の気を起こすのは。

鳥居（鳥居！）があり、急な石段があり、石碑があり、浄めの水がある、いかにも神社、歴史を持った典型的な神社、桂濱神社である。西欧方面の永遠に近いものを感じすべきはここか。例えば万物の精霊であるとか。「いずこにおわしますかはしらねども」。

この国の首都のまんなかは空虚だと指摘したのは『表徴の帝国』（ちくま学芸文庫96年）におけるロラン・バルトだが——それは皇居という区画だ——、神社の中枢区画もまた空白で



あった。が、今日は正体を現わした。ほんとか。《欲郷》の群像がいやらしく謂集していて、密度高い。

君は若桑みどり『象徴としての女性像』（筑摩書房2000年5月）を読んだか。「真理」や「正義」、「聖母」や「フランス共和国」を象徴する女性像は空白の記号だというのだ。塩釜神社の落田作品も肯定的積極の実像ではない。被虐的ですからあるのは故なしとはしないが、それをどう優美に共感共苦させるか。

通りを歩くのは気持ちがいい。何百年もさまざまな人がいろんな思い、いろんな用向きで歩いた道だ。そして両側の住居はひっそりと、だが実のある精一杯のいろんな暮らしがっつらなっている。浜崎のおばあちゃまは人品秀れゆったりしている。岡本敦生《CRUST-cocoon97-1》は浜崎家の門内、玄関前に据えつけられた。

「何をやるんかのう」

河村のタバコ酒店には写真製自動販売機が出現。学生よりも学生みたいな仕事で、フム、軽快シンプル、お若い。

「何をやるんかのう」

山村さんちの北条真理《奏であう風景》がシブイね。僕の好みでは炸裂ポリシーで五穀豊穰、大漁祈願、商売繁盛、街並み一変、町内全域を染めあげるみたいに、モダンな福の神がお通りになるほど祝祭日モードにしてみらいたいな。

どんがめ岩のあたりでは、夜毎、船虫、岩虫、錨虫、泡吹虫やらが伊東敏光《潮耳》なんぞの鉄肌にすり寄ってきて妖しくびっしり貼りついているのかもしれない。古代的古生物的情景である。

そうして僕はあらためて桂浜に出る。

ただの自然石であるのでなく、過剰に人工的でもなく、おおぶりに謙抑に、でもいちめんに表情を持った加納士朗《Untitled》があり、のびやかな前川義春《10mの流動体》がある。その先に石造の大鳥居がキリッと立っている。3つの房を垂らした堂々たる注連縄をつけている。神道美術を集約する卓抜の大象徴。

この定型は堅牢。このシンボル造形物はあるいは無敵の全日本美術チャンピオンであるかも知れぬ。既往の名造形としてこうも意識したのははじめてだ。注連縄つき大鳥居に負けてはいられぬ。“われら”は現代であり、より知的でより総合的である。可能ならより深まった人間でありたい。

形ある物によって人を漁（すなど）る造形思索者らの新たな創造に期待する。

ヴァレリー気分ではじめたが、この地で理解したことのひとつ、説明抜きですが、万葉集的です。万葉の土壌なのですな、当地は。極上の行楽地にもなる資格は十分です。まちがっても原子力発電所なんぞを誘致しないでよ。「臨界域」、楽しめた。

（おおい・けんじ／広島市立大学国際学部教授）





和田拓治郎

- 1.成功
2001 鉄 170×100×150cm
- 2.成功の方法
2002 鉄 230×180×90cm
- 3.欲郷
2002 鉄 70×500×500cm





4



加納士朗

4. Untitled

2002 黒御影石 170×400×200cm



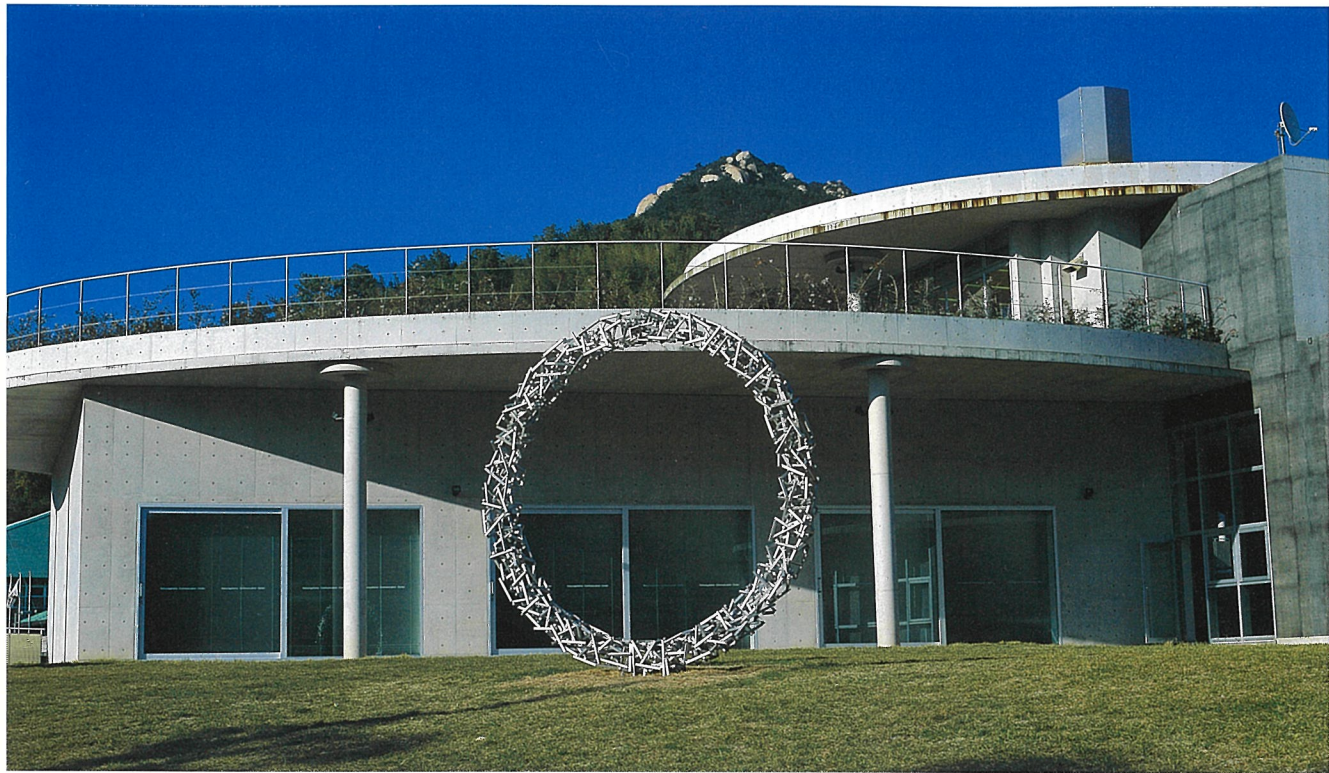
5

前川義春

5. 氷点
2000 御影石 140×50×230cm 100×50×250cm
6. 10m の流動体
2000 御影石 100×80×1000cm



6

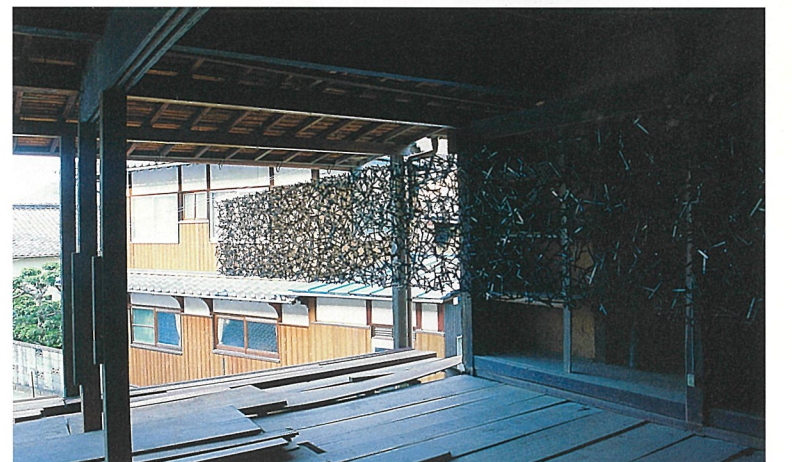


7

木村東吾

7. 集積融合 - manoma -
 2002 ステンレススティール 230×230×25cm
 8. 放出する形状
 2002 鉄 80×15×900cm

16



8

17



9

伊東敏光

9. 潮耳

2002 鉄 75×120×82cm

10. 無題

1991 鉄 177×185×75cm

11. 湖景立像

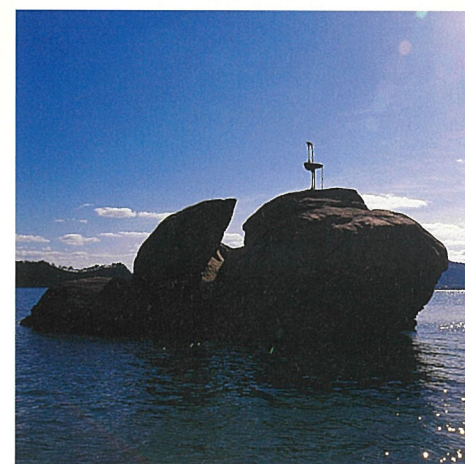
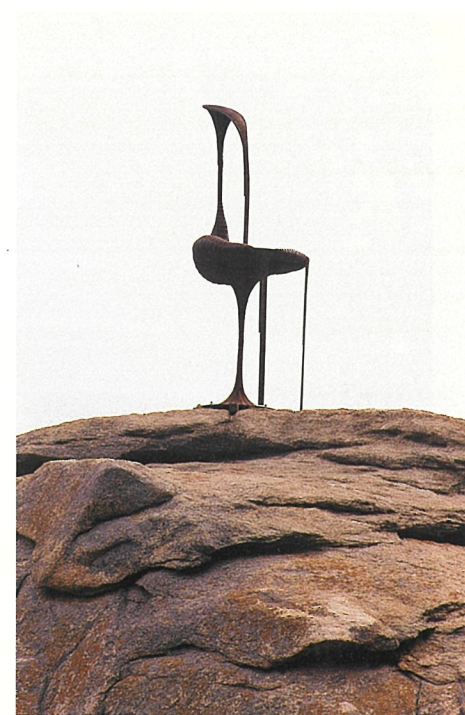
2001 鉄 178×173×170cm

12. 水景立像

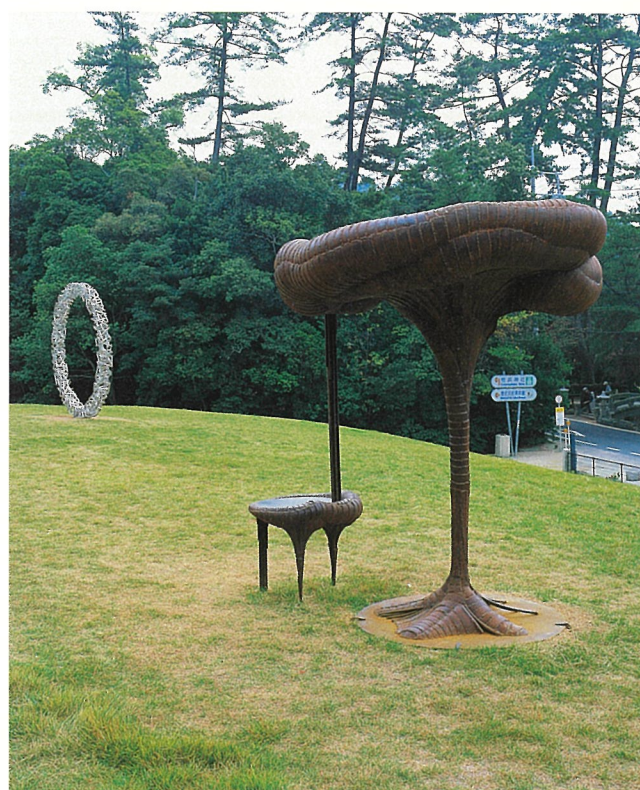
2001 鉄 228×86×90cm



10



12



左：木村東吾「集積融合 - manoma -」

11

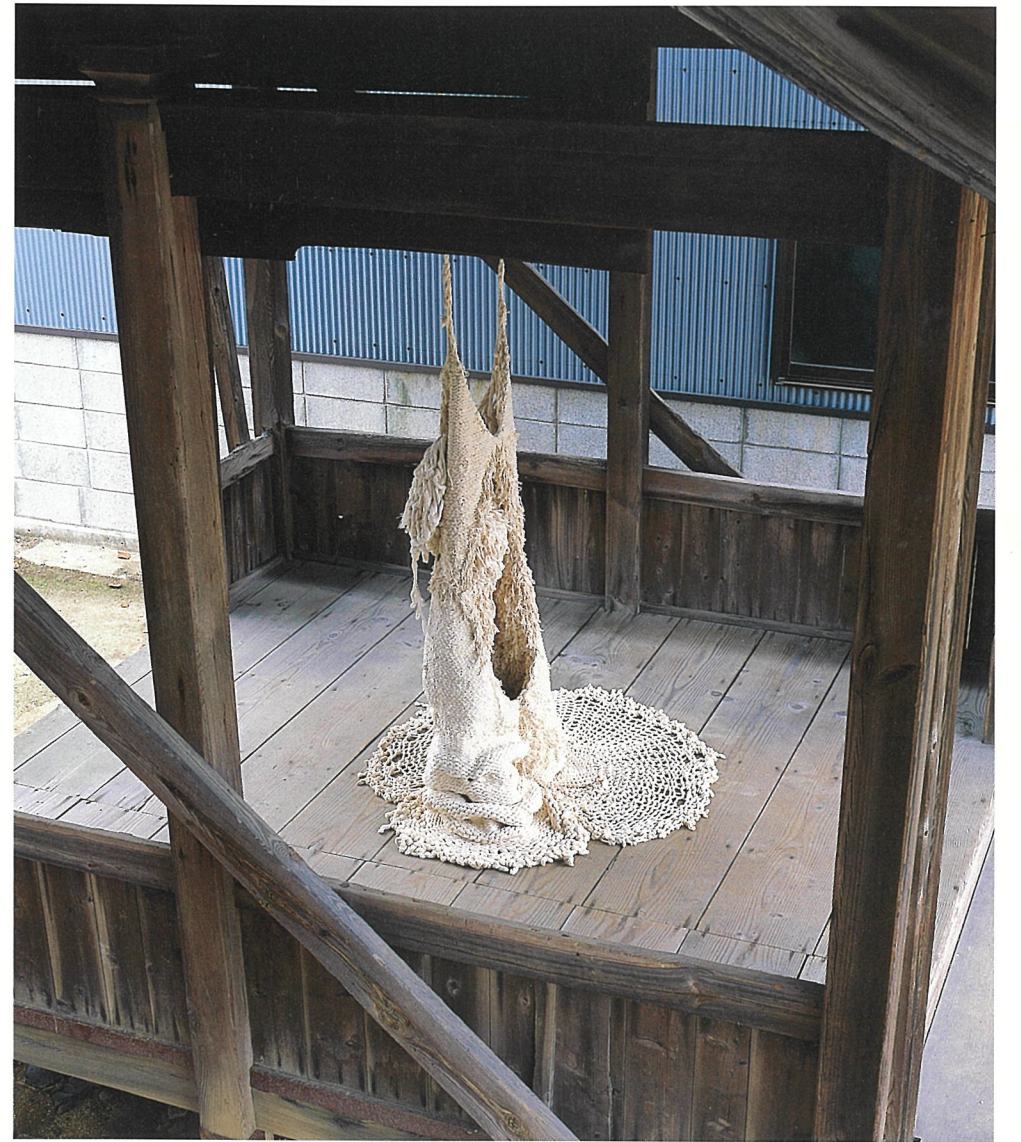


13

落田彩

13. 深く静かな響
2002 綿糸 150×80×80cm

20



21



14



15



16

北條真理

14. 奏であう風景 - image on image -

2002 麻混綿 200×500cm

15. 出逢いの瞬間 - form to feel -

2001 土佐美濃和紙 各45×45×5cm

16. その先の時間(とき) - form to feel -

2001 土佐美濃和紙 各45×45×5cm



17

岡本敦生

17. CRUST-cocoon97-1
2000 白御影石 170×80×80cm
18. Photo's work 2002
2002 写真、石 170×90cm

24



18

25

オープニングコンサート

- 序 奏 ● インプロビゼーション①〜アンデスの主題提示
(ケーナ・ソロ)
- シーン1 ● 「上弦の曲」
作曲：沢井忠夫 (十三絃箏・フルート) 作品「集積融合 - manoma -」の前にて
- 中 奏 ● インプロビゼーション〜アンデスの主題変奏①
(ケーナ・ソロ)
- シーン2 ● 十七絃独奏のための「火垂る」
作曲：沢井忠夫 (十七絃箏・ソロ)
- 「調べ三章 (四つの音による)」
作曲：沢井忠夫 (十三絃箏・ソロ) 作品「湖景立像」の前にて
- 終 奏 ● インプロビゼーション③〜アンデスの主題変奏②
(ケーナ・ソロ)



榊記彌栄 (さかき・きみえ)

箏・十七絃奏者。沢井箏曲院教授。故沢井忠夫を師とし、'90年のリサイタルを皮切りに、ジャンルにとられない自由なスタイルでのライブ活動を、広島はもとより、国内外で盛んに行う。ライブツアー2001 では、アメリカ、リトアニア他、精力的にコンサートを行っている。



石丸良道 (いしまる・りょうどう)

ケーナ・フルート奏者。笛に魅せられ、フルートや南米アンデス地方のアシ笛・ケーナを演奏する。ジャンルにこだわらず、箏やパーカッション等とのセッションや即興演奏に積極的に挑戦している。

参加アーティスト・展示作品

和田拓治郎 (わだ・たくじろう)

1975年広島県生まれ。現在広島市立大学博士後期課程在学。'98年から「餓鬼像」の連作、庭園添景物など風刺を題材とした金属作品を制作。

- 1 成功
- 2 成功の方法
- 3 欲郷

加納士朗 (かのう・しろう)

1975年栃木県生まれ。'02広島市立大学大学院修了。宇都宮産の大谷石に魅せられたのを機に、野外を対象とした石彫の作品を中心に制作。

- 4 Untitled

前川義春 (まえかわ・よしはる)

1955年福井県生まれ。東京芸術大学大学院修了。'85ドイツ学术交流会 (DAAD) の奨学金を得て渡独。ミュンヘン美術大学で学び、ヨーロッパ各地の国際石彫シンポジウムや展覧会に参加。'91同大学修了、帰国。'94年より広島に住み、「東条アートドキュメント」(兵庫)、「歴史的建造物と芸術の共振」(広島)等の企画に参加。

- 5 氷点
- 6 10m の流動体

木村東吾 (きむら・とうご)

1978年広島県生まれ。現在広島市立大学大学院博士課程在籍。ステンレスや鉄の薄片を組み合わせた彫刻を中心に制作。'02世界文化遺産白川郷芸術祭などに参加。

- 7 集積融合 - manoma -
- 8 放出する形状

伊東敏光 (いとう・としみつ)

1959年千葉県生まれ。東京芸術大学大学院彫刻専攻在学中より、鉄を素材とした有機的フォルムの彫刻を制作。その後、蟬の抜け殻や砂鉄などを彫刻素材として使用し、なびす画廊、ギャラリーなつか、秋山画廊等で発表を続ける。'94年より広島に住居を移し、「歴史的建造物と芸術の共振」展等の企画に参加。

- 9 潮耳
- 10 無題
- 11 湖景立像
- 12 水景立像

落田彩 (おちだ・あや)

1977年広島県生まれ。'02広島市立大学大学院修了。糸を編むことによる立体作品を制作。糸の彫刻として個展 ('00広島 '01東京 '02佐賀)を中心に発表。'03日本照明家協会20周年記念アートイベントに参加。

- 13 深く静かな響

北條真理 (ほうじょう・まり)

1976年栃木県生まれ。京都精華大学卒業。広島市立大学大学院修了。染めることを自らの言葉として制作。主な活動として、'01京展、ギャラリーマロニエ (京都/個展)。

- 14 奏であう風景 - image on image -
- 15 出逢いの瞬間 - form to feel -
- 16 その先の時間 (とき) - form to feel -

岡本敦生 (おかもと・あつお)

1951年広島市生まれ。多摩美術大学大学院終了。石をメイン素材に、写真やビデオを使った作品等、幅広く制作。主な活動として個展・野外展・美術館企画展・国際シンポジウム等への参加および企画。広島にある主な作品として、広島新空港のエントランスの円柱が乱立している作品がある。

- 17 CRUST-cocoon97-1
- 18 Photo's work 2002

作品展示マップ



謝辞

本展の開催にあたり、下記の方々のご協力を得ました。
ここに記して深く感謝の意を表します。(50音順・敬称略)

株式会社七福組
株式会社砂川組
株式会社松村石材
倉橋島海産株式会社
倉橋石材工業株式会社
倉橋石材振興会
倉橋ライオンズクラブ
呉石材合資会社
中国ガス機器株式会社
徳澤運輸株式会社
松原区
有限会社安芸建設
有限会社倉橋物流大城戸醤油

石崎憲司
石地敏幸
岡峯敏則
越智寿朗
河村栄造
河村真明
斎藤健男
城戸正彦
砂川英治
徳澤則秀
中川秀己
中木睦男
花岡キミ子
浜崎キミエ
原盛春
松村一二
松村健三
松村真次
山村考嗣

Kurahashi ART DOCUMENT 2002 - 臨界域 -

倉橋町町制50周年記念事業

倉橋アートドキュメント 2002 - 臨界域 -

会場：広島県安芸郡倉橋町本浦地区と桂浜周辺

会期：2002年10月5日~10月31日

主催：倉橋アートドキュメント実行委員会 倉橋町制50周年記念実行委員会

企画：倉橋アートドキュメント運営委員会

小田明博 室義剛 橋本承造 加納士朗 木村東吾

助成：  エネルギア 文化・スポーツ財団 財団法人泉美術館

後援：倉橋町 広島県教育委員会 倉橋町教育委員会 中国新聞 中国放送

カタログ

編集：倉橋アートドキュメント運営委員会

寄稿：藤本黎時（広島市立大学長）

松田弘（広島県立美術館主任学芸員）

大井健地（広島市立大学国際学部教授）

デザイン：中村圭

発行：倉橋アートドキュメント運営委員会（倉橋町役場内）

広島県安芸郡 倉橋町上河内 1210-1

Tel.0823-53-1111

印刷：アート印刷株式会社

広島県福山市南本庄 1-10-38

© 2003 All Rights Reserved. The copyrights to all the artworks,
photographs and texts belongs to the artists and writers.

Printed in Japan